



干潟の上の神アサギと思われる構造物

元来、泡瀬には入浜式塩田を造成するのに適した広い干潟があった。それに目を付けた人たちが、二百余年前の昔から塩づくりを始め、それが長く子孫に引き継がれてきた。この塩づくりを通じて戦前の泡瀬の繁栄があった（泡瀬誌、昭和 63 年より引用）。

今では残念ながら塩づくりは見られないが、広大な干潟の端の方（泡瀬通信施設前）には大きな石が直線状に置かれている。おそらく、ここで大規模な塩田があったと思われる。この広大な干潟の片隅に、静かに勝連半島（または久高島）を望むように御願所と思われる構造物がある。県内で各集落ごとに設置されている神アサギ（地域によっては神ハサギ）と似ているが、もしこの構造物が神アサギだとしたら、その中に置かれている大小 1 対の石やつぼ状のものは、イビ（神が降りる石）と思われる。遠く、ニライカナイにすむといわれる神様を大切にしてきた地元の人たちの心が、今もなお泡瀬干潟で生きている。

陸の上にあるアサギと異なる点は、石の表面に無数に付いている「フジツボ」の存在である。この位置まで、海水がくるということを表している。つまり、ほぼこの構造物は海の中に沈むのである。もう少し、陸側の方に行くと、そこにもほぼ同様な構造物が見られる。ひょっとしたら、海中に沈んでしまう場所では、ノロやお祈りをする人たちが通えないので、陸側に新たに建設したのかもしれない。地域の人たちの航海安全・家内安全・豊漁祈願などを昔から行っているのであろう。